

日本語終助詞の動態的变化に関する考察

— 男女による終助詞使用の均質化に焦点をあてて —

曹 春 玲
岩 井 千 秋

1. はじめに

本研究は、日本語の話ことばに顕著に現れる性差によることば使いの違いとその変化状況を動態的観点から検証しようと試みるものである。対象とする言語項目は終助詞であり、特に「よ、ね、の、わ」の4つの終助詞、それに終助詞のつかない無標の場合（以下ではこれを「ゼロ終助詞文」と呼び、略して「ゼロ」と表記する）の5つに焦点をあてる。終助詞は、言語学上は単なる文法的意味の最小単位である形態素に過ぎない。しかし、発話に際してどの終助詞が選択されるかによって、男性による発話か、あるいは女性によるそれかなどが容易に判断されることが多く、社会言語学的、あるいは語用論的側面を強く有していると言える。さらに、終助詞は、特定の語彙項目などと異なり、発話に頻出することも、本研究が目指す実証研究の観察対象として好都合である。

研究目的は、上述の5項目の男女による使用が、戦後（1950年～現在まで）どのように変化してきたのかを明らかにすることである。研究課題は、対象とした終助詞に性差による動態的变化が生じているのかどうか、もしあるとすればその変化の方向を示すことである。

2. 先行研究

2.1 終助詞の特徴

日本語の終助詞は、聞き手や出来事に対する話し手の態度や心情を表す。西田（1992：193）によると、終助詞は、文の終末部に位置し、内容的・意味的なまとまりを形成した文の叙述や判断を受けて、それに対する話し手の感動や詠嘆を表出したり、疑問、希望、禁止などを付け加えて聞き手への働きかけの態度を表明しながら文を完結させる役割を担うものである。さらに、終助詞は主に話しことばで使われ、自然な会話のやりとりを成立させるためにとっても重要な働きをしていると考えられる。

2.2 終助詞の男女差

本研究が対象とする「よ、ね、の、わ」の男女による使用の違いについては、すでに多くの先行研究が行われている。それらをまとめたのが次の表1¹である。

表1:「よ、ね、の、わ」4つの終助詞の男女差に関する先行研究

終助詞		男女差	先行研究事例
よ	だよ	M	遠藤1998:80、尾崎1997:70、尾田1964:70
	てよ	F	遠藤1998:80、本田1990:109
	のよ	F	遠藤1998:81、尾田1964:70、佐久間1983:103
	わよ	F	遠藤1998:81、尾田1964:71、尾崎1997:80
ね	だね	M	尾崎1997:71、尾田1964:71、遠藤1998:80
	てね	F	尾田1964:72
	のね	F	尾田1964:72
	わね	F	尾田1964:72、尾崎1997:71、佐久間1983:68
	よね	F	尾田1964:72
の		F	尾田1964:72、鈴木1976:68、野田1993:47
わ		F	尾田1964:70、尾崎1997:80、鈴木1976:68

このように、終助詞の男女による使用の違いは、これまで多くの研究者によって論じられてきた。しかし、いずれの研究においても、終助詞の使用が動態的な観点からは捉えられているとは言えず、ある特定の期間のみを対象として調査が行われているものばかりである。ところが終助詞の男女による使用の違いやその変化状況は、長い年月の中で徐々に変化している可能性があり、戦後の半世紀のような長期間を対象とした研究が必要だと考えられる。筆者の調べた限りでは、このような研究事例を見出すことはできなかった。

3. データの概要

動態的研究と言っても、過去の実際の発話を再現してそれを収集することは困難である。そこで、本研究では文学作品に現れる会話文を調査することとした。対象としたのは、1950年～2003年の半世紀の芥川賞受賞文学作品 60篇²に現れるすべての会話文であり、これらを電子化して分析テキストを作成した。

分析に際しては、年代による終助詞使用の違いを調査する目的から、これらの作品を3つの時期（50～65年、70～85年、90～03年）に分けた。このように分けたのは、戦後の約60年間を均等に分割し、年代間の比較をし易くするためである。この3つの年代を以下ではそれぞれ「A」、「B」、「C」と表示する。さらに、終助詞の使用には、男女差のみならず、話者本人の年齢や職業などが影響していると考えられる。そのため、入力に際しては会話文に性別、年齢別、職業別のコードを付した。

次に3つの年代間の終助詞使用状況の比較方法についてである。対象とする日本語の発話量が多ければ多いほど、それに比例して5項目の出現回数が増えるのは当然のことである。そのため、3つの年代間の比較を同じ条件で行うためには、比較対象とするそれぞれの年代の発話量を均等にする工夫が必要である。そこで、各年代の分析テキストから発話文を無作為に抽出し、比較対象とする文の総数を3つの年代で統一することとした。

さらに、抽出対象とした文についてであるが、これには疑問文以外の平叙文とすることとした（例えば、「行く、行くよ、行ってよ、行ってね、行くわ、行きます、行くんだ、行くの」

など。否定文は抽出対象の文に含まれている)。ここで言う疑問文とは発話の意図が相手に何かを尋ねる場合である。疑問文を除いたのは、疑問文には疑問詞「か」が使われるのに加え、調査対象の「の」や「ね」が疑問詞として使われる場合あるからで、本研究では、平叙文に使われる終助詞と疑問文に使われるそれとは厳密に区別する必要があると考えた。実際の分析に際しては、例えば、「行く。」「行く?」「行くの。」「行くの?」「行かない。」「行かない?」のような文であれば「句点」と「疑問符」のマークによって平叙文か、疑問文かを判断し、疑問符が付いていれば機械的に疑問文として処理した。ただし、イントネーションによっては、表向きは平叙文であっても、疑問詞のない疑問文になる場合があるが、そのような事例が分析テキストにはあまり多くなかったことから、本研究ではイントネーションによる区別は行わないこととした。

発話文の無作為抽出に際しては、各年代の発話量が均等になるように、話者の性別と年齢・職業要因³に基づいて、3つの年代からそれぞれ200文ずつ取り出した。これをまとめたのが次の表2である。全体では総数2,400の文を使って、年代間、及び年齢・職業による比較を行った。

表2：分析テキストから抽出した比較対象の総文数のまとめ

性別 x 年齢・職業	A (50年代)	B (70年代)	C (90年代)
M 学生	200文	200文	200文
F 学生	200文	200文	200文
M 社会人	200文	200文	200文
F 社会人	200文	200文	200文

4. 分析結果

分析に際しては、無作為抽出した2,400文中に、上述の5つの調査項目がどの程度出現しているかを、登場人物(発話者)の性別によって集計してみることにした。次の1~5は「よ、ね、の、わ、ゼロ終助詞文の具体例である。

- 【1】それがね、いないのよ (F 学生 91⁴)
- 【2】それはまた地味だわね (同上)
- 【3】…方解石だとわかるのも結構大変なの。 (F 学生 91)
- 【4】じゃ、いつか、私も行くわ。 (同上)
- 【5】そんなことです (ゼロ)。 (M 社会人 91)

このように分析した結果をまとめたのが次の表3である。

表3: 「よ、ね、の、わ、ゼロ」の全体の出現回数と役割 (年代 × 男女)

年代	性別	度数/%	調査5項目					合計
			よ	ね	の	わ	ゼロ	
A	男性	度数	212	59	4	0	125	400
		%	53.0	14.8	1.0	0.0	31.3	100
	女性	度数	112	69	57	97	65	400
		%	28.0	17.3	14.3	24.3	16.3	100
B	男性	度数	189	52	6	0	153	400
		%	47.3	13.0	1.5	0.0	38.3	100
	女性	度数	154	64	57	63	62	400
		%	38.5	16.0	14.3	15.8	15.5	100
C	男性	度数	156	63	9	0	172	400
		%	39.0	15.8	2.3	0.0	43.0	100
	女性	度数	120	92	43	24	121	400
		%	30.0	23.0	10.8	6.0	30.3	100

分析の結果、5項目の出現頻度にはそれぞれ次のような大まかな特徴がうかがえる。まず、すべての年代、かつ男女のいずれによっても多用されているのが「よ」(28.0~53.0%)と「ゼロ」(15.5~43.0%)である。次に、「ね」については、「よ」と比べると出現頻度はそれほど高くないものの(13.0~23.0%)、年代間で比較してみると、男女の出現頻度がCの年代で若干増えている。「の」については3つの年代で女性の出現頻度は高い(10.8~14.3%)が、男性のそれはごくわずかである(1.0~2.3%)。最後に、「わ」の使用は女性のみであるが(6.0~24.3%)、年代によってその頻度が下がっていることがうかがえる。

以上の結果を踏まえ、次は、調査5項目のそれぞれについて、年代と男女要因による比較を統計的に行い、変化状況を検証してみることにした。次節はその結果についてである。

5. 「よ、ね、の、わ、ゼロ」の出現頻度に関する統計処理結果

出現頻度の年代、男女間の比較に際しては、カイニ乗検定(一覧表内の等質性の検定)を行うこととした。以下は、5項目それぞれの出現回数のグラフ表示と、統計処理結果である。

1) 「よ」

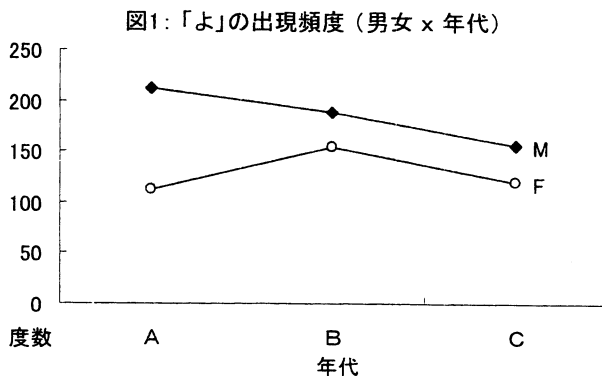


図1から、「よ」については、全体的に年代が進むにつれて、その出現頻度が減少する傾向がうかがえる。カイニ乗検定の結果、 $\chi^2 = 8.398$, $df = 2$, $p = 0.015$ となり、5%水準で有意な結果が得られた。ただし、この有意差は主に 50 年代 (A) の男女差が強く影響しており ($\chi^2 = 22.143$, $df = 1$, $p = 0.001$)、70 年代 (B)、90 年代 (C) では男女差は少なくなり、これら 2 つの年代では男女間に統計的な有意差は認められなかった (B: $\chi^2 = 2.502$, $df = 1$, $p = 0.114$, n.s., C: $\chi^2 = 3.495$, $df = 1$, $p = 0.062$, n.s.)。

2) 「ね」

図2: 「ね」の出現頻度 (男女 × 年代)

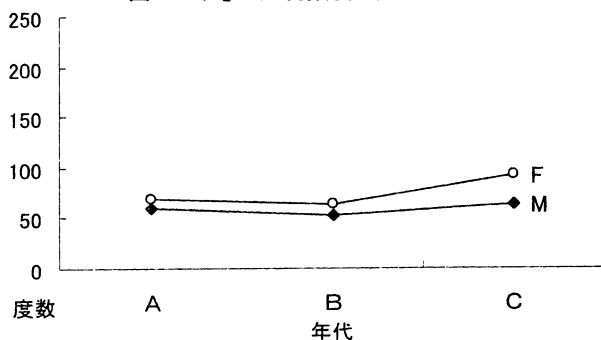
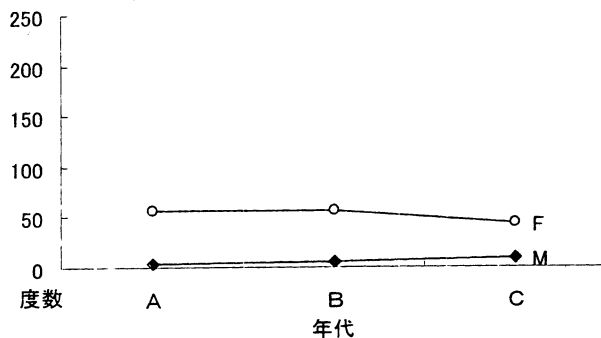


図2を概観すると、「ね」は、出現頻度が90年代に微増していることが読み取れるが、年代間の変化は少なく、男女差もあまり大きくないようである。カイニ乗検定の結果もそれを示しており ($\chi^2 = 0.945$, $df = 2$, $p = 0.623$, n.s.)、全体的には、有意差はないことが判った。ただし、90年代 (C) については、男女間に5%の水準で有意結果が得られた ($\chi^2 = 4.549$, $df = 1$, $p = 0.032$)。この結果は、90年代では女性の方が男性よりも「ね」をより多く使っていたことを意味している。

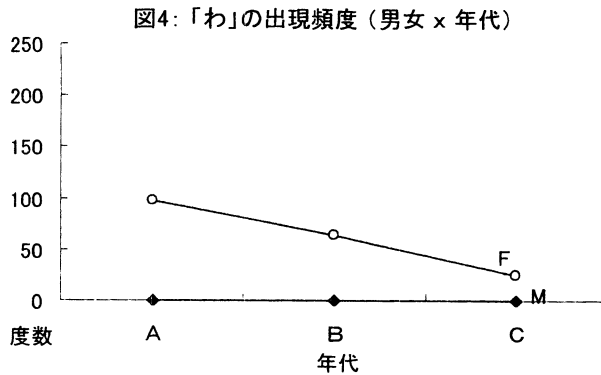
3) 「の」

図3: 「の」の出現頻度 (男女 × 年代)



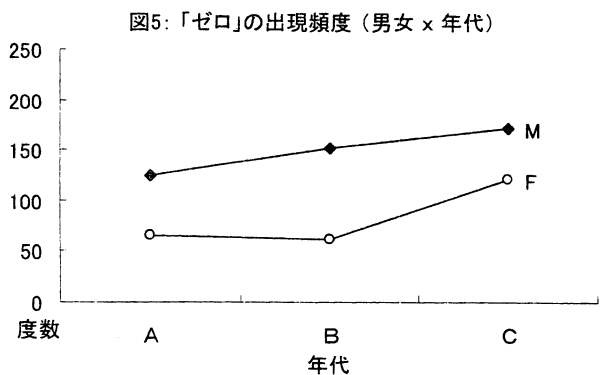
次に「の」の分析結果であるが、図3に示した年代間、男女間の違いをカイ二乗検定で検証した結果、有意な変化は認められなかった ($\chi^2 = 3.533$, $df = 2$, $p = 0.170$, n.s.)。ただし、各年代での男女の差は歴然としており、統計結果もすべて1%水準で有意な結果となり、その違いを裏付けている (A: $\chi^2 = 42.949$, $df = 1$, $p = 0.001$, B: $\chi^2 = 38.406$, $df = 1$, $p = 0.001$, C: $\chi^2 = 20.907$, $df = 1$, $p = 0.001$)。

4) 「わ」



「わ」については、男性による使用がいずれの年代でもなかったため、カイ二乗検定を行うことが出来なかった。しかし、「わ」は女性のみに使われていることから、男女差は明らかである。さらに、図4によると、後の年代になるほど女性による「わ」の使用が急速に減ってきていることがわかる。

5) 「ゼロ」

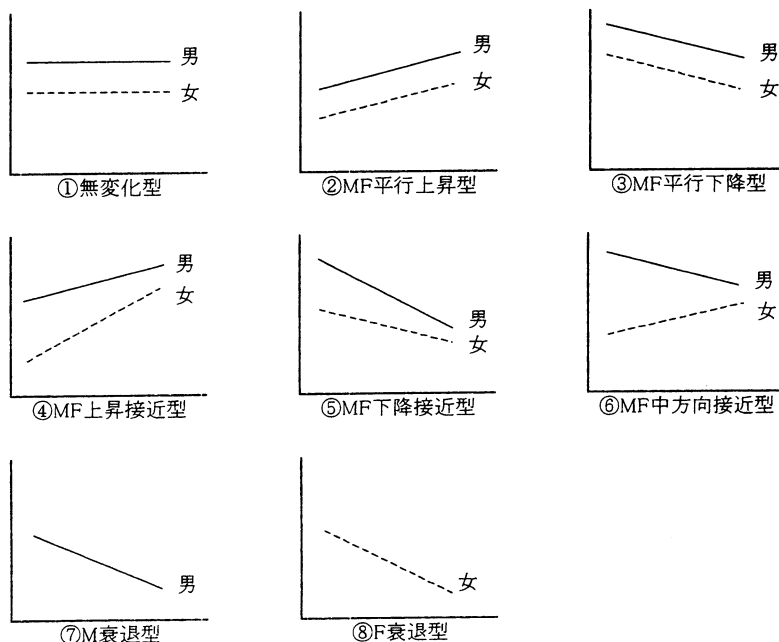


最後に「ゼロ」についてである。図5から判断すると、「ゼロ」は年代とともに出現頻度の増加傾向がうかがえる。全体的な変化は、5%水準で有意な結果 ($\chi^2 = 8.602$, $df = 2$, $p = 0.013$) が得られた。男性のみに絞った場合、3つの年代間には有意な差は得られなかったが (χ

$\chi^2 = 5.474, df = 2, p = 0.065$)、女性の場合は年代間に1%水準で有意な差が認められ ($\chi^2 = 21.3683, df = 2, p = 0.001$)、ゼロ終助詞文の使用が女性に限っては有意に増加していることが確認された。さらに、各年代で男女間の比較を行ったところ、いずれの年代でも有意差が認められたが (A: $\chi^2 = 15.368, df = 1, p = 0.001$, B: A: $\chi^2 = 30.604, df = 1, p = 0.001$, C: A: $\chi^2 = 6.512, df = 1, p = 0.011$)、男女の差は90年代でもっとも小さくなっている。

6. 「よ、ね、の、わ、ゼロ」の方向性

以上、ここまでは5つの項目について、3つの年代間と男女間で比較を行ってきた。これらの分析結果に基づいて、次は研究課題の後半、すなわち「よ、ね、の、わ、ゼロ」の5項目がどのような方向に変化しているかについて考えてみたい。年代と男女差を考慮した場合、およそ次の8つのような変化パターン⁵が考えられるだろう。



これらのうち、①はまったく変化のない場合であり、「無変化型」と名付けることとする。②と③は男性と女性の言い方が年代を超えて同じように変化している場合であり、それぞれ「MF 平行上昇型」、「MF 平行下降型」と呼ぶこととする。①～③については、男女間の差そのものの距離に変化はないわけで、全体の変化は性差に起因するものとは言えないだろう。

性差による変化が見られるのは④～⑥の場合である。④は男女ともに使用が増加し、接近する場合で、これは「MF 上昇接近型」と言えるだろう。⑤はその逆で、「MF 下降接近型」と呼ぶこととする。⑥はこれら2つと異なり、一方が増加し、他方が減少することで接近する場合であり、「MF 中方向接近型」と呼ぶこととする。

最後に、⑦と⑧についてであるが、これらは、外見上は男女差が減少しているように思われるが、性差の変化とは必ずしも言えない。なぜならば、男性専用形式（⑦）や女性専用形式（⑧）のように、そもそも男性、または女性による使用がなかったわけであり、男女間の差そのものに変化が生じたわけではないからである。

理論的には、①～⑧以外に男女差が拡大する場合も考えられるだろう。しかし、本研究が対象とした5項目に関する限り、男女差が拡大するケースはなかった。そのため、男女差拡大のパターン化は、行わないこととする。以下では、対象5項目がどのパターンにもっとも近いかを特定してみよう。

1) 「よ」については年代によって男女の変化状況が異なる。全体的には（図1参照）、「よ」の使用は年代の上昇とともに男女差が小さくなっている。このことから、「よ」の変化状況は、上の⑥「MF 中方向近接型」であると言えるだろう。

2) 「ね」については、その使用が男女ともにさほど変動していない。このことは「ね」の使用が、そもそも中性的な言い方であることを示しているのだろう（図2参照）。90年代に若干男女差が広がり、女性の方が「ね」をより多く使っているが、これが動態的な変化であるかどうかを断定するには、さらに研究が必要であるだろう。全体的には、「ね」の変化は8つのパターンの中では、①「MF 無変化型」にもっとも近いと考えられる。

3) 「の」も「ね」と同様、年代間の変化は極めて少ないと言えるだろう。男女間には大きな差が認められるが、それは50年代から一貫した傾向である。これらのことから、「の」は「ね」と同じく上の①「無変化型」であると言えるだろう。

4) 「わ」の使用はいずれの年代においても女性のみである。しかし、その女性のみを使用も年代が上がるにつれ、急速に減少している（図4参照）。今日では、女性の「わ」の使用はむしろ稀であるとさえ言えるだろう。これらの結果から、「わ」の変化は上の⑧「F 衰退型」だと言えるだろう。

5) 最後はゼロ終助詞文についてである。「ゼロ」は年代間によって変化があり、男女ともに「ゼロ」の使用は上昇している。しかし、その上昇傾向は女性の方がより強いようである。その結果、特に90年代では「ゼロ」の男女差が小さくなっている（図5参照）。これらのことから、「ゼロ」の変化パターンは上の④「MF 上昇近接型」と特定できるだろう。

7. まとめ

本研究の研究課題は、「終助詞に性差による動態的变化が生じているのかどうか、もしある

とすればそれはどのような変化であるか」を明らかにすることであった。分析の結果、動態的变化が生じていると結論付けられる実証的根拠がいくつか得られた。加えて、それらの変化状況をパターン化して示した。総じて言えることは、半世紀という長期のスパンで観察してみると、日本語の性差は、多くの研究者がどちらかと言うと主観的に論じてきたように（例えば、金田一 1994）、あるいは一般の日本語話者がそれとなく感じているように、徐々に小さくなりつつあると言えるだろう。この傾向がとりわけ顕著だったのは「よ」と「ゼロ」である。これらについては、それぞれ「MF 中方向接近型」、「MF 上昇接近型」が認められ、男女差が少なくなる、換言すると均質化傾向のあることがわかった。本研究の実証データで説明するには限界があるものの、特に「ゼロ」による均質化がかなり活発に生じている原因として、間違いを恐れずに言うならば、男性的でも女性的でもない無標の表現形式を取って選ぶことで、他の表現に影響することなく均質化が推し進められているのかもしれない。

さらに「よ」と「ゼロ」で男女の均質化が顕著である理由として、目立つところで均質化が起こらないとその事実が日本語使用者に感じられない、というメカニズムが関与しているのかも知れない。「よ」と「ゼロ」は対象とした5項目の中ではもっとも多く出現した項目である（表2参照）。男女の社会的役割が、戦後、急速に均質化したことを考えると、その変化が日本語に映し出されているとしても不思議ではない。その変化が、意識的にもたらされているかどうかは確かではないが、変化していることが言語使用者に感じられないと意味がないだろう。すなわち、周辺の終助詞で変化が生じてても変化状況は感じられないかもしれず、むしろ頻繁に会話に登場する「よ」や「ゼロ」であるからこそ、それらの変化を察知してもらうには都合がいいわけである。これについての理論的根拠は、今後さらに研究を重ねる必要のあることは言うまでもない。

これらの中性的な変化傾向とは異なるものの、従来から女性専用とされてきた「わ」についても顕著な変化傾向が認められた。「F 衰退型」と名づけたように、この終助詞は、女性による使用が近年、急速に減少してようである。厳密には、男性による使用がないことから男女差が縮小しているわけではないが、結果として、この終助詞についても男女差がなくなる傾向にあると言えるだろう。

主な結果は以上のとおりであるが、本研究はあくまでも文学作品を分析テキストとした研究であり、実際の発話による変化を示したと断言するには早計であろう。今後は、過去の映像や音声録音データなども分析対象とし、より口語データに近い発話を分析して、本研究の結果を検証する必要がある。

注

1. 表1中の「男女差」の欄では、関係する先行研究によって主に男性による用法であると結論付けたものを「M」で、女性によるそれと結論付けたものを「F」と表記している。
2. 60篇文学作品についてはA、B、Cの3つの年代で20篇ずつを選択することとした。

3. 年齢・職業要因は、本来ならば「年齢」と「職業」に分けられるべきであろう。しかし、本研究の場合、この二つを厳密に区別することが困難な登場人物が多くいたため、「年齢・職業」とし、この中に、学生－社会人の2つのカテゴリーを設けた。その上で、登場人物の年齢が、明らかに20歳以下の場合には学生に含めた。
4. カッコ内の数字は文学作品の発表年数である。
5. これらの図では便宜上、男性を上、女性を下に描いているが、その逆もありうる。

参考文献

- 井上文子（1991）「男女の違いから見たことばの世代差－標準意識が男女差をつくる－」『日本語』4-6 明治書院
- 上原聡・福島悦子（2004）「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」『世界の日本語教育』14 国際交流基金 pp. 109-123
- 太田淑子（1992）「談話にみる性差の様相」『横浜国立大学教育紀要』32 pp. 329-342
- 岡本真一郎（2000）「ことばの多様性」『ことばの社会心理学』カナニシア出版 pp. 147-183
- 小川早百合（1997）「現代日本語における文末表現の男女差」『日本語教育論文集－小出退職記念』凡人社 pp. 205-220
- （2004）「話しことばの男女差－定義・意識・実際－」『日本語とジェンダー』Vol. 4, 日本語ジェンダー学会
- 大野晋（1992）「日本語の助動詞と助詞」『岩波講座 日本語7 文法II』岩波書店 pp. 3-28
- 遠藤織枝（2002）「男性語のことばの文末」『男性のことば・職場編』ひつじ書房 pp. 33-45
- 尾崎喜光（1997）「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場』ひつじ書房 pp. 33-57
- 国立国語研究所（1991）『現代語の助詞・助動詞－用法と実例』東京秀英出版
- 国語学会（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 金田一春彦（1994）「言葉の性差さらに小さく」『読売新聞』10月24日
- 金田一春彦・林大・柴田武（編）（1988）『日本語百科大事典』大修館書店
- 佐久間鼎（1952）『現代日本語法の研究』厚生閣
- 田野春美（1993）「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって」『日本語学』10月号 明治書院 pp. 43-50
- 中村純子（2000）「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要』第1号 pp. 1-11
- 曹春玲（2005）「文末表現における日本語の男性語と女性語」西日本言語学会編『ニダバ』第34号 pp. 155-164
- （2006）「映画に現われる男女ことばの調査と分析」西日本言語学会編『ニダバ』第35号 pp. 115-124